

君が代(言霊学)

R7.6.5
陰陽思想講座

君が代は、平安時代(794~1192年頃)の歌集「古今和歌集」(905年)の詠み人知らずの賀歌(長寿や繁栄を祈る歌)が由来です。

また、男女の永遠の絆を歌った恋の歌という解釈もあります。

古代日本語では「き」は男性、「み」は女性を表わすことは前回言霊で学びました。

日本神話に登場する最初の男女神は「イザナキ(イザナギ)」と「イザナミ」です。

「イザナキ」の「キ」は男性を、「イザナミ」の「ミ」は女性を指します。

また、神の存在は完全な存在であることから、君が代の「君(キミ)」は心身ともに完全に成長した男女を指すと考えるようです。

そして、「さざれ石の 巖(いわお)となりて」は、小さな小石が結束して大きな岩石になることから、協力し合い、団結し合うことを表わしています。

「君が代は 千代に八千代に さざれ石の 巖となりて 苔のむすまで」

現代語に訳すと

「あなたの命が、千年も八千年も永遠とも言える時間、小さな石が大きな岩になって、その岩に苔が生えるまで、長く長く続きますように」

となります。

つまり、「君が代」は、「君」は「心身ともに成長した男女が」、「代」は「時代を超えて」となりますが、ここでの「君(あなた)」は特定の人物を指しているわけではなく、身近な人を指すと考えられており、君が代は身近な人の長寿を祈る歌として歌われてきました。

「千代に八千代に」は「永遠に千年も八千年も、生まれ変わってもなお」

「さざれ石の巖となりて」は「協力し合い、団結して」

「苔のむすまで」は「固い絆と信頼で結びついていこう」となるようです。

千年以上前の平安の時代から歌い継がれてきた「君が代」ですが、もともとは、長寿を祈る歌であり、男女の永遠の絆を歌った恋の歌でもあったようです。

いろいろな解釈がありますが、いつの時代も誰かのことを想って詠われた歌だったということに変わりはないようです。

世界最古で、世界最短の国歌。そして、平和を願う国歌は世界で日本唯一の国歌と言えるようです。

君が代の変遷

平安時代に詠まれた君が代は、鎌倉時代以降、庶民に広まり、長寿を祈る歌、お祝いの歌、さらには恋の歌として、様々なお祝いの場面で歌われるようになりました。

江戸時代には、三味線で曲を付けたものが酒場で流行ったこともあるようです。

国歌として歌われるようになったのは明治 13 年で、雅楽奏者林廣守(はやしひろもり)が曲に起こし、ドイツ人音楽家フランツ・エツケルトが西洋風和声を付けることで国歌として用いられるようになりました。

また、明治 23 年(1890 年)の「生徒用唱歌」という教科書に掲載された「君が代」は、3 番までであったようです。

番	作者	歌
1 番	詠み人知らず	君が代は 千代に八千代に さざれ石の 巖となりて 苔のむすまで
2 番	源頼政 (平安時代末)	君が代は 千尋(ちひろ)の底の さざれ石の 鶉(う)のゐる磯と あらはるるまで
3 番	藤原俊成 (平安～鎌倉時代)	君が代は 千代ともささじ 天の戸や いづる月日の 限りなければ

また、3 番の歌が異なっていたという説もあります。

番	作者	歌
3 番	詠み人知らず	君が代は 限りもあらし 長浜の 真砂の数は よみつくすとも

さらに、明治時代の別の教科書には 4 番までであったという説があります。

1 番、2 番、3 番は「生徒用唱歌」と同じで、4 番が加わります。

番	作者	歌
4 番	大江匡房 (平安時代)	君が代は 久しかるべし わたらひや いすずの川の 流たえせで

第二次世界大戦前までは、国家平安の歌として親しまれていましたが、戦中に天皇を称える歌として君が代が使われたこと、軍国主義の象徴となったことなどから、戦後、GHQ(連合国軍総司令部)が日の丸掲揚と君が代の斉唱を禁止し、その後も厳しく制限をしましたが、特定の場合に日の丸掲揚と君が代の斉唱を認めました。

その後、日本には正式な国歌がなかったので、平成 11 年(1999 年)に正式に制定されるまでの間は、慣習として君が代が国歌として使われていました。

学習指導要領では、1978 年に「国歌を斉唱することが望ましい」、1989 年には、「入学式や卒業式などにおいては、その意義を踏まえ、国旗を掲揚するとともに、国歌を斉唱するよう指導するものとする」と改訂され、現在のように入学式、卒業式で君が代が歌われるようになりました。

以上